

# 大阪方言における数字のアクセント —自然数の1桁から8桁まで—

福盛 貴弘

## A Study of the Accent for Numbers in the Osaka Dialect

FUKUMORI Takahiro

### Abstract

The main purpose of this paper is to show the accent rules for numbers in the Osaka dialect. The surveyed person is a man in his 50s whose language formation site is Osaka City, Osaka Prefecture. In the Osaka dialect, it is possible to pronounce with an appropriate accent by combining the single accent in a natural number of 1 to 8 digits and the accent designation in the previous component. In addition, it was found that for "-*man* (ten thousand)", the accent specified in the previous component shifts to the single accent according to the number of digits in the previous component.

**キーワード**：大阪方言 京阪式アクセント 自然数 アクセント単位 前項へのアクセント指定

### 1. 序

京阪式アクセントは、中井(2002)によって京都方言アクセントが、杉藤(1996)によって大阪方言アクセントが網羅的に記述されている。しかし、これらの辞典では、筆者の世代(1970年生まれ)が若い世代のアクセントとして示されている。これ以降、網羅的に大阪方言アクセントを示した資料はないため、筆者のアクセントを記録しておこうと思い、これまで福盛(2010, 2019, 2020)や福盛・金濱(2019)でその規則性を示してきた。そうやって、各世代のアクセントが記述されていけば、変化の全体像が将来的に見えてくるであろうという期待を込めてのことである。

そこで、本稿では、福盛(2019)で部分的に取りあげた数字のアクセントの全体像をとらえることを目的としている。福盛(2019)は、『Le livre des deux mille phrases (フ

ランス語 2000 文』(Frei 1953) に対する大阪方言訳を行なった福盛 (2015) が元になっている。Frei (1953) では、1841 ~ 1873 の例文で数字が扱われており、他のところでも断片的に出てくる。しかし、ほとんどが助数詞がついた形であるため、数字単独で言った場合のアクセントは例文からは導き出すことができない。助数詞がついた場合、後項となる助数詞によるアクセント指定によって、単独形とはアクセントが異なるからである。そこで、本稿では 8 桁までの自然数<sup>1)</sup> における数字を扱い、それらがどのように発音されるかについて記述するに至った。

## 2. 方法

### 2.1. 被調査者情報

アクセントについては、筆者の内省を元にしてしている。筆者は 1970 年生まれで、言語形成地は大阪市城東区である。1991 年から大阪を離れているが、どこに住んでも大阪弁でしか喋っていないため、生来のアクセントは生きたままである。なお、よそいきの大阪弁を喋っている時に、時折共通語アクセントが混ざることがあるが、それに対する気持ち悪さは実感できるため、切り替えはできる<sup>2)</sup>。

### 2.2. 記述方法

大阪方言アクセントの概要については、福盛 (2010 : 240-241) では以下のように記されている。

共通語のアクセントは「下がり目があるかないか、下がり目があるとすればどこにあるのか」という特徴がありましたが、京阪方言ではこれに加えて「高く始めるか、低く始まるか」という条件があります。(中略) これは、単語によって高

<sup>1)</sup> 本稿では、非負整数としての 0 を含んだ語形のアクセントを示している。

<sup>2)</sup> 尾上 (1999) では、大阪人がよその土地で生活する時の話し方として、4 種類のタイプを挙げている。要約すると、(a) にわか仕込みの東京弁を使うタイプ、(b) 高校時代のままの関西風の話し方を続けるタイプ、(c) 大阪弁と共通語を使い分けるタイプ、(d) 大阪風と東京風がごちゃごちゃに混ざってしまうタイプ、である。同書の指摘では、4 タイプが 4 分の 1 ずつぐらい居たということである。筆者は、(b) に該当する。そして、「よそいき」としているのは、同書の指摘にもある通り、よその土地で暮らす時には「わりあい色の薄い関西弁を喋る」からである。(b) に属する人は、(a)(c)(d) になることはなく、そういった喋り方をことさら嫌う傾向がある。なお、筆者の経験則では、新幹線に東京から乗った際に、名古屋を過ぎたあたりから、乗客の言葉が共通語でなくなる割合が増えるので、このあたりで (b) は「よそいき」から生来の方言に、(c) は共通語から大阪弁に切り替えていると考えている。そして、筆者が実家で親兄弟や親戚と喋る時は、「よそいき」は消え去る。(a)(d) のタイプは、この切り替えを行なわない人たちである。

く始まるか低く始まるかという式音調<sup>3)</sup>の指定が加わっているからです。「桜」「詐欺師<sup>4)</sup>」「心」は高く始まる高起式、「雀」「兜」は低く始める低起式のアクセントになっています。高起式は下がり目がない限り高いままの音調が続きます。よって、「桜」の場合、下がり目がないので高平となるのです。低起式は下がり目があればその直前のモーラだけが高くなり、下がり目がなければ最後のモーラで高くなっています<sup>5)</sup>。「雀が」であれば「低低低高」のようになります。

上述の例をふまえると、「桜」「雀」は下がり目がなく(0型<sup>6)</sup>)、「詐欺師」「兜」は2モーラ目の後ろに下がり目がある(2型)。下がり目の位置については同じであるが、式音調が異なるので音声実現形は異なる。これらの語の音調は以下のとおりである。「桜」は高起式なので「高高高(H0型)」、「雀」は低起式なので、「低低低(L0型)」、「詐欺師」は高起式なので「高高低(H2型)」、「兜」は低起式なので「低高低(L2型)」となる。よって、高起式では高いモーラが複数個所あらわれることがあるが、低起式では高いモーラ(あるいは音節)が1か所しかあらわれないのが特徴となる。

そして、複合語になると、式保存の法則が働く。式保存の法則とは、前項の式音調が複合語全体に影響を及ぼすという法則である。例えば、「きつね」は低起式下がり目なしなので「低低低(L0型)」、「冷やし」および「うどん」は高起式下がり目なしなので「高高高(H0型)」である。これらが複合語になる場合、「きつねうどん」なら「低低低低低(L4型)」のように低起式で「うどん」の1モーラ目の後に下がり目があるアクセント型(複合アクセント規則によって後項が3モーラの場合に-3型になる<sup>7)</sup>)に、「冷やしうどん」なら「高高高高低(H4型)」のように高起式で「うどん」の1モーラ目の後に下がり目があるアクセント型になる。

<sup>3)</sup> 式音調については、「高起式」「低起式」より詳細な分析による名称として「平進式」「上昇式」がある(上野 1989)。「上昇式」については、語末に高くなる遅上がりタイプと、1モーラ目から2モーラ目にかけて高くなる早上がりタイプがある。大阪方言の式音調は「高起平進式」と「低起(遅上がり)上昇式」の2タイプに分かれるが、本稿では、それぞれの略称として「高起式」「低起式」という用語を用いている。

<sup>4)</sup> 「詐欺師」のアクセントについては、大阪方言では「高高低」から「低高低」に変わっている人が一定数存在する。3拍語のH2については、単語語の場合、大阪方言アクセントではかなり崩壊しているが、「2つ」「君ら」「千葉市」などの派生語についてはまだ健在である。

<sup>5)</sup> 「すみません」のように、撥音を含む音節が高くなる場合もある。

<sup>6)</sup> アクセント型を示す数字については、0は平板型(下がり目なし)、正の数は前から数えた、負の数は後ろから数えたモーラ数の後ろに下がり目がある起伏型を意味する。

<sup>7)</sup> 大阪方言における前項が低起式である場合の基本的な複合語アクセント規則は、以下のとおりである。後項が1モーラの場合-2型(真夏L0+日H1→真夏日L3)、2モーラの場合-3型(あやめL0+池H1→あやめ池L3)、4モーラの場合-4型(四つ珠L0+そろばんL0→四つ珠そろばんL5)になる。

### 3. 記述

#### 3.1. 1桁の自然数

単独形や 11 や 223 などの末尾に用いられる場合は、(1) の通りである<sup>8)</sup>。

(1)	0	レー	H1	／ゼロ	H1
	1	イチ	H1		
	2	ニー	L0		
	3	サン	H0		
	4	シー	L0	／ヨン	H1
	5	ゴー	H0		
	6	ロク	H1		
	7	ヒチ	H1	／ナナ	H1
	8	ハチ	H1		
	9	キュー	H1	／クー	H0

#### 3.2. 2桁の自然数

十の位のみ単独形は、(2) の通りである。

(2)	10	ジュー	L0		
	20	ニジュー	H1		
	30	サンジュー	L2		
	40	ヨンジュー	H1	／シジュー	H1 ~ H2 <sup>9)</sup>
	50	ゴジュー	H1		
	60	ロクジュー	H2		
	70	ナナジュー	H2		
	80	ハチジュー	H2		
	90	キュージュー	H1		

<sup>8)</sup> 何点 vs 何点でどっちが勝ったようにスコアを読みあげる時はこの限りではない。この場合は、得点が1桁である場合、元が高起式であるか低起式であるかにかかわらず、L0で発音する。6vs0におけるロクゼロでも、3vs2におけるサンニーでも、LLLHで発音される。なお、2桁以上の場合、vsを略さずタイをはさみ、それぞれの数字は単独形のアクセントのまま発音される。この場合、13vs1であれば、ジューサントイチとなり、イチも単独形のアクセントのままになる。

<sup>9)</sup> 「シジュー」については、下読みした者から加えておいた方が年代別の比較の指標になるという指摘があったため、加えた。ただし、筆者にとっては、『論語』の不惑の元となる「四十にして惑わず」ぐらいでしか発音することがないため、アクセントは安定しない。

ついで、11～19の単独形は、(3)の通りである。10は単独形では低起式であるが、一の位が加わると高起式平板型であるH0になる。ただし、13と15は例外で、高起式頭高型のH1になる。

- |     |    |           |                       |
|-----|----|-----------|-----------------------|
| (3) | 11 | ジュー + イチ  | H0+H1                 |
|     | 12 | ジュー + ニー  | H0+L0 / ジュー + ニ H0+H0 |
|     | 13 | ジュー + サン  | H1+H0                 |
|     | 14 | ジュー + シー  | H0+L0 / ジュー + シ H0+H0 |
|     |    | ジュー + ヨン  | H0+H1                 |
|     | 15 | ジュー + ゴー  | H1+H0 / ジュー + ゴ H1+H0 |
|     | 16 | ジュー + ロク  | H0+H1                 |
|     | 17 | ジュー + ヒチ  | H0+H1                 |
|     |    | ジュー + ナナ  | H0+H1                 |
|     | 18 | ジュー + ハチ  | H0+H1                 |
|     | 19 | ジュー + キュー | H0+H1                 |
|     |    | ジュー + クー  | H0+H0 / ジュー + ク H0+H0 |

同じく単独形が低起式である30については、そのままの型を保ち、後ろに一の位がついてもL2のままである。31～39の例を(4)に示す。

- |     |    |             |                         |
|-----|----|-------------|-------------------------|
| (4) | 31 | サンジュー + イチ  | L2+H1                   |
|     | 32 | サンジュー + ニー  | L2+L0 / サンジュー + ニ L2+H0 |
|     | 33 | サンジュー + サン  | L2+H0                   |
|     | 34 | サンジュー + シー  | L2+L0 / サンジュー + シ L2+H0 |
|     |    | サンジュー + ヨン  | L2+H1                   |
|     | 35 | サンジュー + ゴー  | L2+H0 / サンジュー + ゴ L2+H0 |
|     | 36 | サンジュー + ロク  | L2+H1                   |
|     | 37 | サンジュー + ヒチ  | L2+H1                   |
|     |    | サンジュー + ナナ  | L2+H1                   |
|     | 38 | サンジュー + ハチ  | L2+H1                   |
|     | 39 | サンジュー + キュー | L2+H1                   |
|     |    | サンジュー + クー  | L2+H0 / サンジュー + ク L2+H0 |

21～29、41～49、91～99のように単独形が高起式頭高型H1のものについては、十の位の単独形のアクセントは変わらず、後ろに一の位を付け加えるだけになる。た

だし、51～59については、(3)が適用される。21～29の例を(5)に示す。

(5)	21	ニジュー + イチ	H1+H1
	22	ニジュー + ニー	H1+L0 / ニジュー + ニ H1+H0
	23	ニジュー + サン	H1+H0
	24	ニジュー + シー	H1+L0 / ニジュー + シ H1+H0
		ニジュー + ヨン	H1+H1
	25	ニジュー + ゴー	H1+H0 / ニジュー + ゴ H1+H0
	26	ニジュー + ロク	H1+H1
	27	ニジュー + ヒチ	H1+H1
		ニジュー + ナナ	H1+H1
	28	ニジュー + ハチ	H1+H1
	29	ニジュー + キュー	H1+H1
		ニジュー + クー	H1+H0 / ニジュー + ク H1+H0

なお、20や50のように、10の位の数が1拍語である場合は、前半が伸びて後半が縮まるという発音もある。20をニジューではなくニージュ、50をゴジューではなくゴージュといったようにである<sup>10)</sup>。この場合、単独形ではそれぞれH2となり、後ろに一の位がある場合は(5)で示した後項部分の型となる。21をニージュイチと言うなら、H0+H1になるということである<sup>11)</sup>。

一方で、同じ高起式でも単独形がH2である60、70、80の場合は、H0になるため、(3)のように発音される。例えば、61ならH0+H1、73ならH0+H0といったようにである。

### 3.3. 3桁の自然数

百の位のみ単独形は、(6)の通りである。

<sup>10)</sup> 算数や数学の答えの数字を読みあげる時には、このように言うことはないが、調子よく数を数える時にはよくある言い方である。ジュは半長ぐらいの長さで発音されることがあるが、ニーの長音ほどの長さはないため、表記としては割愛している。なお、前項が2拍の場合でも、単独形でサーンジュL3、ヨーンジュH1、ロークジュH3、ナーナジュH3、ハーチジュH3のようになることがある。前項になる場合は、(3)～(5)の規則が適用される。単独形と基本的には変わらないが、長音が含まれるため、その分下がり目の位置がずれているだけのことである。3桁以上では、100においても同様に、ヒヤークH2と言うことがある。理論上、1,000もセーンL0になるのだが、現実には1,000まで数えることがない。適当に数を数えて、めんどくさくなって突然1,000にしとくかといった場合に言うことはあるので、全く使用語彙ではないわけではない。

<sup>11)</sup> ニージュやゴージュに限って、9においてクーに対するクと同様に、キューに対するキュといった長音がなくなる形も可能となる。ニージュ+キュならH2+H0となる。

(6)	100	ヒャク	H1
	200	ニヒャク	H2
	300	サンビャク	L2
	400	ヨンヒャク	H1
	500	ゴヒャク	H2
	600	ロツピャク	H3
	700	ナナヒャク	H1
	800	ハツピャク	H3
	900	キューヒャク	H1

100の後ろに十の位や一の位がつく場合は、H0になる。これは、H1だからということではなく、他に200、500、600、800が同じ型になる。代表的に100の例を(7)で示す。

(7)	101	ヒャク + イチ	H0+H1
	110	ヒャク + ジュー	H0+L0
	111	ヒャク + ジュー + イチ	H0+H0+H1

300、400、700、900は、後ろに数が続いても、単独形と型は変わらない。301ならL2+H1、777ならH1+H0 + H1となる。

### 3.4. 4桁の自然数

千の位のみ単独形は、(8)の通りである。

(8)	1,000	セン	L0 / イッセン	L3
	2,000	ニセン	L2	
	3,000	サンゼン	L3	
	4,000	ヨンセン	L3	
	5,000	ゴセン	L2	
	6,000	ロクセン	L3	
	7,000	ナナセン	L3	
	8,000	ハッセン	L3	
	9,000	キューセン	L3	

千の位のみ単独形は、1,000 のセンを除けば、低起式の -2 型 (L-2) である /-7 セン/ で一貫している。そして、後ろに数字が続く時は、全て L0 になる。(9) に例を示す。

(9)	1,001	セン + イチ	L0+H1
	1,002	セン + ニー	L0+L0
	2,010	ニセン + ジュー	L0+L0
	2,020	ニセン + ニジュー	L0+H1
	2,030	ニセン + サンジュー	L0+L2
	3,100	サンゼン + ヒヤク	L0+H1
	3,200	サンゼン + ニヒヤク	L0+H2
	3,300	サンゼン + サンビヤク	L0+L2

前項が低起式平板型 L0 で後項が高起式の場合、高起式の高くなる拍まで低平が続く。1,001 は L0+H1 なので LLHL、3,200 は L0+H2 なので LLLLHHL となる。前項が L0 で後項も低起式の場合、前項は末尾で一旦高くなり、後項の初頭ではいったん下がる。そして、後項の低起式はそのまま維持される。1,002 は L0+L0 なので LHLH、2,030 は L0+L2 なので LLHLHLL (~ LHHLHLL) となる。

### 3.5. 万を表す自然数

#### 3.5.1. 1 桁 + 万の自然数

1 桁 + 万のみの単独形は、(10) の通りになる。3 万を除けば、H1 で一貫している。

(10)	10,000	イチマン	H1
	20,000	ニマン	H1
	30,000	サンマン	L2
	40,000	ヨンマン	H1
	50,000	ゴマン	H1
	60,000	ロクマン	H1
	70,000	ナナマン	H1
	80,000	ハチマン	H1
	90,000	キューマン	H1

これらの後に数字が続く場合、高起式のもの H0、低起式のもの L0 で始まって、あとは先述したとおりの言い方で続いていく。(11) に例を示す。

(11)	11,000	イチマン + セン	H0+L0
	11,100	イチマン + セン + ヒャク	H0+L0+H1
	22,000	ニマン + ニセン	H0+L2
	23,000	ニマン + サンゼン	H0+L3
	31,000	サンマン + セン	L0+L0
	31,200	サンマン + セン + ニヒャク	L0+L0+H2
	31,300	サンマン + セン + サンビャク	L0+L0+L2
	33,300	サンマン + サンゼン + サンビャク	L0+L3+L2

### 3.5.2. 2桁+万の自然数

2桁+万のみの単独形は、(12)の通りになる。30万のみ低起式になるが、他は-4型である /-ジューマン/ で一貫している。

(12)	100,000	ジューマン	H1
	200,000	ニジューマン	H2
	300,000	サンジューマン	L3
	400,000	ヨンジューマン	H3
	500,000	ゴジューマン	H2
	600,000	ロクジューマン	H3
	700,000	ナナジューマン	H3
	800,000	ハチジューマン	H3
	900,000	キュージューマン	H3

これらの後に数字が続く場合、10万、50万、60万、70万、80万はジューまでの部分がH0になり、20万、30万、40万、90万はジューまでの部分が2桁での単独形のままになる。後項は、1桁+万の単独形の型になる。(13)に例を示す。

(13)	110,000	ジュー + イチマン	H0+H1
	130,000	ジュー + サンマン	H0+L2
	220,000	ニジュー + ニマン	H1+H1
	230,000	ニジュー + サンマン	H1+L2
	330,000	サンジュー + サンマン	L2+L2
	350,000	サンジュー + ゴマン	L2 + H1

### 3.5.3. 3桁+万の自然数

3桁+万のみの単独形は、(14)の通りになる。300万のみ低起式になるが、100万を除くと-3型である /-ヒャク ㄱマン/ で一貫している。

(14)	1,000,000	ヒャクマン	H1
	2,000,000	ニヒャクマン	H3
	3,000,000	サンビャクマン	L4
	4,000,000	ヨンヒャクマン	H4
	5,000,000	ゴヒャクマン	H3
	6,000,000	ロツピャクマン	H4
	7,000,000	ナナヒャクマン	H4
	8,000,000	ハツピャクマン	H4
	9,000,000	キューヒャクマン	H4

これらの後に数字が続く場合、100万、200万、500万、600万、700万、800万はヒャクまでの部分がH0になり、300万、400万、900万はヒャクまでの部分が3桁での単独形のままになる。万までについては、その後に(13)が続くことになる。(15)に例を示す。

(15)	1,100,000	ヒャク + ジューマン	H0+H1
	1,110,000	ヒャク + ジュー + イチマン	H0+H0+H1
	1,300,000	ヒャク + サンジューマン	H0+L3
	2,200,000	ニヒャク + ニジューマン	H0+H2
	3,100,000	サンビャク + ジューマン	L2+H1
	3,300,000	サンビャク + サンジューマン	L2+L3
	4,100,000	ヨンヒャク + ジューマン	H1+H1
	4,300,000	ヨンヒャク + サンジューマン	H1+L3

### 3.5.4. 4桁+万の自然数

4桁+万のみの単独形は、(16)の通りになる。〇〇センマンについては、全て低起式となり、-3型である /-セン ㄱマン/ で一貫している。

(16)	10,000,000	イッセンマン	L4
	20,000,000	ニセンマン	L3
	30,000,000	サンゼンマン	L4

40,000,000	ヨンセンマン	L4
50,000,000	ゴセンマン	L3
60,000,000	ロクセンマン	L4
70,000,000	ナナセンマン	L4
80,000,000	ハッセンマン	L4
90,000,000	キューセンマン	L4

これらの後に数字が続く場合、センまでの部分がL0になり、後項は(14)、(9)と続いていくことになる。1500万ならセン+ゴヒャクマンでもイッセン+ゴヒャクマンでもL0+H3となり、3300万ならL0+L4になる。

## 4. 考察

### 4.1. 前項における「3」の特殊性

3については、単独形や後項末尾ではH0となるが、前項となる場合は低起式になるという点で、式保存の法則が適用されず、他の数字とふるまいが異なっている。十、百、万、十万、百万が一律に高起式になろうとしているけれども、3が前項に来るとその規則から外れ、例外となっている。他の数字と比べると、例外的なふるまいをしているが、前項となる3はL0であろうとしていることが分かる。この点を再確認することにする。

まずは、十から見ていく。前項の無い10を除いて見てみると、潜在的には/-ㄱジュ-/という-3型が想定できる。20、50、60、70、80についてはその通りである。では、40や90がH1となっている点をどう捉えるべきか。前項に特殊拍を含む数字がある場合には、H1となっているが、これは特殊拍を含む音節が前項となる場合は下がり目の位置が1拍前にずれるという説明が成り立つ。そして、30については、前項はL0で、後項は-3という組み合わせによって、L2になると言える。同様に、十万では/-ジュㄱマン/という-4型、百万では/-ヒャクㄱマン/という-3型であり、30万はL0+4でL3、300万はL0+3でL4となるのである。

ついで、百を見てみる。百は一見ややこしそうに見えるのだが、/-ヒャㄱク/という-2型が想定できる。200、500、600、800については、その通りである。特殊拍について、促音と撥音および長音で規則が異なる。前項末が促音の場合は-2型に従っているが、前項末が撥音か長音の場合は、十と同様に下がり目の位置が1拍前にずれている。したがって、高起式の中での例外は700のみとなる。では、なぜ300はL2なのか。L0+2であればL3になるはずだが、下がり目よりもL0単独の音調LHが優先されているということになる。このLHがそのまま残った際に、低起式全体の音調規則として1か所しか高くならないということに抵触するため、後項の下がり目が無

視されたということである。これは3万においても同様で、前項のLHが残ったということになり、〇万におけるH1指定の規則を無視したということになる。

なお、千は/-セㄥン/という-2型、千万は/-センㄥマン/という-3型であるが、全体を低起式に指定するため、3千および3千万については、これらの型通りのアクセントが実現している。

#### 4.2. アクセント単位による境界と前項へのアクセント指定

大阪方言の場合、下がり目の有無だけでなく、高起式か低起式かもアクセント単位による境界にかかわってくる。特に低起式は、末尾が高くなるという規則なので、境界が分かりやすい。数字のアクセントを捉えるにあたって、それぞれの位ごとにアクセント単位の境界があることが分かる。例えば、1,254なら、セン+ニヒャク+ゴジュー+ヨンとなり、L0+H0+H0+H1となり、LL+HHH+HHH+HLとなる。センは前項へのアクセント指定でL0に、ニヒャクおよびゴヒャクは前項へのアクセント指定でH0に、ヨンは単独形のH1になっている。換言すると、(セン(ニヒャク(ゴジュー(ヨン))))と分けることができ、便宜的に示したアクセント単位を示す記号として用いた(の前は、前項へのアクセント指定が加えられるということである。ここでは、((9)((7)((3)((1))))の規則が適用されて先の実現形が発音されるということである。「万」の前に並ぶ数字の場合でも、規則性は同様である。例えば、12,540,000であれば、セン+ニヒャク+ゴジュー+ヨンマンとなり、L0+H0+H0+H1となり、LL+HHH+HHH+HLLLとなる。ここでは、((9)((7)((3)((10))))の規則が適用されている。

では、「万」のあとに数字が後続する時は、どうなるのか。基本的には、「万」の後で境界があるので、「～万」は(10)のような単独形のアクセントになる。(17)に例を示す。

- (17) 12,345,678 センニヒャクサンジューヨンマン ゴセンロツピャクナナジューハチ  
 LL+HHH+LHLL+HLLL LLL+HHHH+HHHH+HL  
 35,041,306 サンゼンゴヒャクヨンマン センサンビャクロク  
 LLLL+HHH+HLLL LL+LHLL+HL  
 23,452,345 ニセンサンビャクヨンジューゴマン ニセンサンビャクヨンジューゴ  
 LLL+LHLL+HLLL+HLL LLL+LHLL+HLLL+H  
 99,999,999 キューセンキューヒャクキュージューキューマン キューセンキューヒャクキュージューキュー

## LLLL+HLLL+HLLL+HLLL LLLL+HLLL+HLLL+HL

ただし、「～万」のアクセントについては、「万」に前接する桁数によって変わってくる。(17)で示したように、4桁+万であれば、単独形アクセントになるのが自然である。それに対して、1桁+万の場合は、そうでない方が自然である。(10)における単独形ではなく、単独形が高起式である語はH0、低起式である語はL0になる。したがって、こちらは前項へのアクセント指定ということになる。(18)に例を示す。

- |      |        |             |              |
|------|--------|-------------|--------------|
| (18) | 10,005 | イチマンゴ       | HHHH+H       |
|      | 15,500 | イチマンゴセンゴヒャク | HHHH+LLL+HHL |
|      | 30,030 | サンマンサンジュー   | LLLH+LHLL    |
|      | 30,033 | サンマンサンジューサン | LLLH LHLL HL |

2桁+万と3桁+万については、単独形と前項指定とが併用される<sup>12)</sup>。例えば、115,000なら、ジュー+イチマンのイチマンは、単独形のH1でも、前項指定によるH0でも、どちらでもいいということになる。2桁+万は(19)に、3桁+万は(20)に例を示す。

- |      |           |              |                               |
|------|-----------|--------------|-------------------------------|
| (19) | 115,000   | ジューイチマンゴセン   | HH+HLLL LHL / HH+HHHH+LHL     |
|      | 315,000   | サンジューイチマンゴセン | LHLL+HLLL HLL / LHLL+HHHH+HLL |
| (20) | 1,005,000 | ヒャクマンゴセン     | HLLL LHL / HHHH+LHL           |
|      | 3,005,000 | サンビャクマンゴセン   | LLLHLL LHL / LLLLLL+LHL       |

なお、2桁+万の場合は、300,000において、万以降の下4桁に1～9が複数あれば、前項指定では不自然になることがある。(21)に例を示す。

- |      |         |                 |                                   |
|------|---------|-----------------|-----------------------------------|
| (21) | 100,550 | ジューマンゴヒャクゴジュー   | HLLL HHH+HLL / HHHH+HHH+HLL       |
|      | 115,500 | ジューイチマンゴセンゴヒャク  | HH+HLLL LLL+HHL / HH+HHHH+LLL+HHL |
|      | 300,550 | サンジューマンゴヒャクゴジュー | LLHLLL HHH+HLL / ?LLLLLL+HHH+HLL  |

<sup>12)</sup> ただし、両方の型を許容できるかについては個人差があり、どちらか一方は受け入れられない者もいる。

345,500 サンジューヨンマンゴセンゴヒャク

LHLL+HLLL LLL+HHL / ?LHLL+HHHH+LLL+HHL

3桁+万の場合は、3,000,000において、(21)と同様のことが起こる。(22)に例を示す。

(22) 1,005,500 ヒャクマンゴセンゴヒャク

HLLL LLL+ HHL / ?LLLLLL+LLL+HHL

3,005,500 サンビャクマンゴセンゴヒャク

LLLHLL LLL+HHL / ?LLLLLL+LLL+HHL

また、3桁+万における上3桁に1～9が複数あれば、前項指定では不自然になることがある。(23)に例を示す。

(23) 1,205,000 ヒャクニジューマンゴセン

HH+HHHLL LHL / ?HH+HHHHH+LHL

1～4桁+万のアクセントについては、桁数が増えるにつれ、前項指定から単独形へと漸次的に進んでいく。このイメージを図1に示しておく。

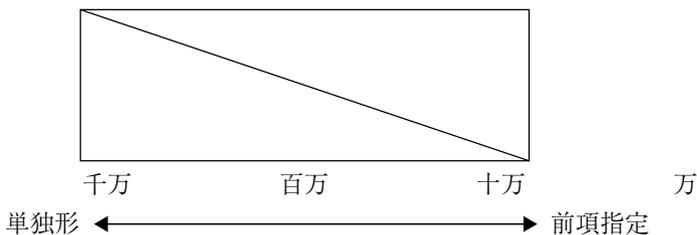


図1：1～4桁+万のアクセントのイメージ図

## 5. 結語

1桁～8桁の自然数については、単独形のアクセントと、それぞれの桁における前項へのアクセント指定の規則性と、どこで単独形になるのかを理解していれば、大阪方言として適切な発音になるということである。なお、億以上の規則性や自然数以外の数字については、稿を改めて論ずることとする。

数字のアクセントにおける大阪方言内での世代差や、その他の近畿方言における地域差については、本稿をたたき台にすれば、異同が明らかになってくると思われる。本稿が対照のための基礎資料になれば幸いである。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00581 の助成を受けたものである。

## 参考文献

- Frei, Henri (1953) *Le livre des deux mille phrases*. Genève: Droz.
- 福盛貴弘 (2010) 『基礎からの日本語音声学』東京堂出版
- 福盛貴弘 (2015) 「大阪方言 2000 文」『一般言語学論叢』17：1-151.
- 福盛貴弘 (2019) 「「大阪方言 2000 文」のアクセント」『一般言語学論叢』22：19-138.
- 福盛貴弘 (2020) 「いかにも大阪弁のアクセント資料」『北海道言語文化研究』18：183-196.
- 福盛貴弘・金濱茉由 (2019) 「エセ大阪弁の音声学的特徴」『実験音声学・言語学研究』11：1-24.
- 中井幸比古 (2002) 『京都府方言辞典』和泉書院
- 尾上圭介 (1999) 『大阪ことば学』創元社
- 杉藤美代子 (1996) 『大阪・東京アクセント音声辞典』丸善
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育, 日本語の音声 音韻 (上)』2：176-205. 明治書院